

東北大学病院総合防災訓練において災害対策本部を運営しました(2013/11/8)

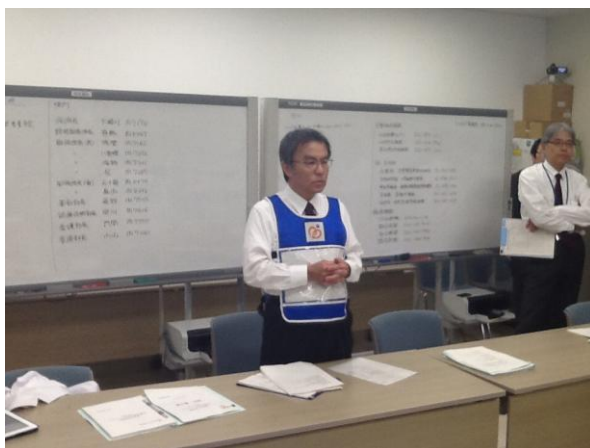
場所：東北大学病院（仙台市）

テーマ：「直下型地震を想定した大量外傷患者受け入れ」

11月8日（金）に東北大学病院総合防災訓練において江川新一教授が災害対策本部医師代表として運営を行いました。想定は仙台市内で震度6強の地震が発生し、予想死者数が100名を超えるため、多数の傷病者が大学病院に訪れ、また地域医療機関との連携も必要となるということです。下瀬川病院長、久志本救命救急センター長をはじめとし、各科の医師、看護師、技師、事務職と学生による模擬患者・家族多数という病院あげてのプレーヤーがそろい、災害対策委員会を中心とした評価者が客観的に評価する訓練となりました。災害研からも奥村誠教授らに評価していただきました。

東日本大震災の教訓を経て東北大学病院の災害対策マニュアルは第6.1版となり、並行して災害対策本部マニュアル第1版を策定したうえでの防災訓練となりました。江川新一教授は災害対策本部マニュアル作成ワーキンググループの代表でもあり、震災のときにできたこと、できなかったことを踏まえて災害対策本部の役割、発災から本部活動開始、本部による情報の収集と発信、各担当者の業務、本部の撤収までが具体的に盛り込まれたマニュアルを作成しました。

発災から15分で本部が立ち上がり、レベル3の災害であることが発信され、患者・職員の安全確認、各部署からの発災時報告（下図システム）に基づいた本部会議の実施、定時報告を踏まえた状況把握と方針徹底のための第2回本部会議を行うなど、想定のスナリオ以上の反応ができました。また、トリアージエリアでは黄色・赤エリアに重症者が押し寄せ、本部から支援者を派遣して対応にあたらせることの課題や、外来支部との連携、本部長へ情報が集中しすぎることで、本部クロノロジーが本部長から離れすぎているなどの課題が浮かびあがりました。東日本大震災から2年8か月がたち、人事異動などにより災害対応の現実を知らない者も増えています。繰り返し現実感をもって訓練することの重要性があらためて明らかとなりました。



本部長として指揮をとる下瀬川病院長



リアルタイムに被害状況を把握するシステム

文責：江川新一（災害医学研究部門）